

子どもと親—ジェンダー平等 ケリマン・サディカイ（コンゴ共和国）

子どもとは非常にデリケートな存在であり、花を育てるように私たちは子どもたちの世話をしなければなりません。子どもたちの教育にいかにお金を投資をしたか、これによって私たちの未来は変わってきます。というのも、社会の未来は子どもたちで決まるからです。人の個性というものは6歳までに形成され、形成された個性は、7歳から8歳までに、徐々に定着していきます。こう考えると、早期教育の重要性が理解できます。早期教育は子どもたちの個性、知性、そして経歴を伸ばすものです。

こうした教育はまず、家庭内で始まります。家庭では子どもたちが周りの人を見事に模倣します。こうした環境において、子どもたちは、周囲の状況を調べ、身の回りのあらゆる物事に着目し、そして、積極的に何かを生み出すプロセスを開始するのです。このため、親は自分の子どもたちを十分に世話し、子どもたちの振る舞いに特に注意を払い、子どもが幼い間は親として子どもに付き添うことを心に留めるべきなのです。また、どういったおもちゃや衣服を子どもたちに与えるべきか、その点についても親は考えなければなりません。

ほとんどの場合、子どもが男の子もしくは女の子として生まれてくる前の段階から、ジェンダーに基づく区別が家庭内で始まっています。女の子なのか男の子なのか、医師が子どもの性別を確認し、父親は、当然男の子を常に歓迎します。そして、子どものために服を買う始めるのですが、ここでもジェンダーによる区別があるのです。女の子ならピンクかレッドで、男の子ならブルーなのです。ただし、性別に関係なく、その子どもの出産は祝福されます。

どんな家庭も自分の子どもたちのために最善の世話をするように心がけます。しかしながら、子どもたちのプレゼントを買う際には、ジェンダーの区別をしないわけにはいかない場合も、しばしばあります。家族だけでなく親戚や友人も、ジェンダーでプレゼントを選びます。女の子は美しい人形、ヘアピン、メイクアップ用の鏡をもらい、男の子は車、ボール、フットボール、自転車をもらうのです。

さまざまな物語やお話も、子育てや子どもたちの教育において、重要な役割を果たします。これらの影響は避けることができません。しかしながら、こうした物語やお話において例えば、「シンデレラ」「赤ずきん」「白雪姫と7人の小人」などに見られるように、私たちはジェンダーの区別を感じるのです。こうしたおとぎ話は世界中で知られており、読み聞かせて子どもたちを育て、そして、こうしたことがまた次の世代へと引き継がれます。こうしたおとぎ話の登場人物は、多くの場合、家族の世話や家事をする女性です。女の子というものは、ほとんどの場合、こうしたおとぎ話を読んで育ち、また、こうしたことを記憶に留める場合もあります。皆さんは、おとぎ話が子どもたちの個性の形成に影響を及ぼすと思いませんか？先ほどもお伝えしたように、子どもたちの個性というものは、一般的に、6歳までに形成されるものなのです。

ステレオタイプは教科書にも見られます。教科書のイラストもお話もステレオタイプの内容が多いのです。母親は料理をし、父親は新聞を読み、祖母はセーターを編み、息子はボールで遊び、その一方、娘はというと、妹の世話をしたり、人形遊びをしたりするのです。文書やイラストが載った学校のテキストは、子どもたちの環境や家庭生活を形づくるだけでなく、将来の職業の選択など、子どもたちの社会生活や未来に影響を及ぼします。ほとんどの場合、女性は教師、看護師、母親、もしくは主婦として描かれます。

現在、若い世代の人びとは、もっと注意を払ってこうした区別にアプローチしています。赤ちゃん用の服や色を選ぶ際も、最近では、ジェンダーに基づく区別などしないことが多いです。男の赤ちゃんも女の赤ちゃんのように、ヘーゼルや他の色の服を着ることもあります。また、自分が遊びたいおもちゃを、子どもたちは自由に選ぶことができます。私にも子どもがいるのですが、娘に電車や車や電気のおもちゃを買うのに何のためらいもありません。私の息子に同じおもちゃを買うのも、同様に何のためらいもありません。現代の親は、子どもたちに読み聞かせをするおとぎ話や物語を選ぶ際、ジェンダーに基づくステレオタイプを避けようと、昔より注意をするようになっていきます。

今日の親は、将来の職業の選択肢という面で子どもたちをサポートします。道理に合わない遠慮などせず、自分の娘の能力にあった仕事であるなら、それが医師、パイロット、整備士、建設技師であろうと、どんな仕事でも選択するように娘をサポートします。そしてジェンダーによる区別なく子どもたちを教育します。孔子も言っています。「教育を受けた者の目標は常に高い。些細な務めは些細な人びとが行うものである。」